

第3章 本市の概況

第1節 沿革

富士吉田市は、山梨県の南東部、富士山麓に位置し、海拔 650～900m に市街地が形成された高原都市です。

古代から数々の神話や民話に彩られた富士吉田は、富士山とともに歴史を刻んできました。北口本宮富士浅間神社や御師の家並みは、人々の富士山への畏敬と信仰心を今に伝えるものです。また、秦の始皇帝の家臣、徐福が伝えたと言われる「甲斐絹」は、明治以降の産業として脚光を浴び、本市は織物産業を軸としながら富士北麓の中核都市の役割を果たしてきました。

市制の施行は、昭和 26（1951）年 3 月 20 日で、富士上吉田町、下吉田町、明見町の 3 町の合併に始まり、昭和 35（1960）年に上暮地地区と合併し現在に至っています。

世界に誇る雄大な富士山の裾野に広がる富士吉田市は、市域の大部分が国立公園⁸内にあり、富士山に抱かれた豊かな自然環境は、多くの恩恵をもたらしています。

本市は、こうした恵まれた環境を活かしながら、「人と環境にやさしいまちづくり」を目指しています。

写真：新倉山浅間公園・忠霊塔からの富士山



第2節 立地

本市は山梨県の南東部、富士北麓に位置し、北を都留市・西桂町、東を忍野村・山中湖村、西を富士河口湖町・鳴沢村、南を静岡県小山町と接しています。

東京都心へ約 100km、甲府市へ約 30km の距離にあります。市域は東西約 11km、南北約 23km、面積 121.74 km²です。

本市は、市域の南部を除く 5,245ha(市域の約 43%)が都市計画区域に、そのうち 1,368ha(市域

⁸ 国立公園：自然公園法に基づき、日本を代表する自然の風景地を保護し利用の促進を図る目的で、環境大臣が指定する自然公園のひとつである。国定公園が都道府県に管理を委託されるのに対し、国立公園は国(環境省)自らが管理する。

の約 11%、都市計画区域面積比約 26%)は用途地域に指定されています。

公共の交通網としての鉄道は、富士急行線が河口湖方面と JR 大月駅を結んでいます。また、道路は、高速自動車国道である中央自動車道富士吉田線及び東富士五湖道路が通じるほか、河口湖を経て甲府方面と連絡する国道 137 号、山中湖を経て御殿場方面と連絡する国道 138 号、大月・都留方面から市内を通り富士方面へ連絡する国道 139 号の 5 路線の広域幹線道路が集中する、道路交通の要衝にあります。



図 3-1 富士吉田市の位置

第3節 地形・地質

本市周辺には、富士山を中心に道志・御坂両山地があり、これらの間を桂川が流れています。山岳・森林など優れた風景に富み、市街地より南部の山麓は、多くが富士箱根伊豆国立公園に指定されています。

本市のほとんどは富士火山地域、火山山麓扇状地に含まれ、北部に御坂山地の一部、北東部に道志山地がわずかに入り込んでいます。

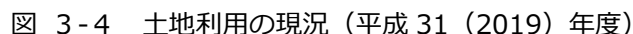
地形区分は、火山体・山地・低地の 3 つに区分でき、火山体と山地は大起伏・中起伏・小起伏・山麓地に分かります。面積比からみると火山地が総面積の約 80% を占め、そのうち富士山では 1,000~1,300m 付近に起伏量 200m 以上 400m 未満に相当する地域が最も多くなっています。火山山麓地は火山山麓にある傾斜面で円錐形火山の裾野に相当します。

低地は扇状地性であり、三角州性の低地はみられません。また、低地は総面積の約 6% とわずかであり、残りが山地に相当します。

その他本市で取り上げるべき地形には、崩落地形・溶岩流・砂質裸地があります。崩落地形とは、急斜面の一部が崩落したもので露岩地や裸地となっているものがほとんどになります。

富士山及び富士山麓は、主に第四紀火山及び火山山麓扇状地です。富士火山は、南部フォッサマ

出典：「富士吉田市誌/行政編・上巻」一部加筆修正



第5節 気象

第1項 気温・降水量

本市は標高の高い富士山の北麓に位置していることもあり、夏は涼しく冬は寒いという寒冷地特有の気象条件であります。

図 3-5、表 3-1 にアメダス河口湖観測所における令和 4（2022）年の気温及び降水量の推移を示します。令和 4（2022）年の最高気温は 8 月の 34.7℃、最低気温は 2 月の -11.3℃と 1 年を通じて寒暖の差が激しくなっています。

また、降水量は 9 月が 279mm と最も多く、次いで 8 月の 252.5mm となっています。

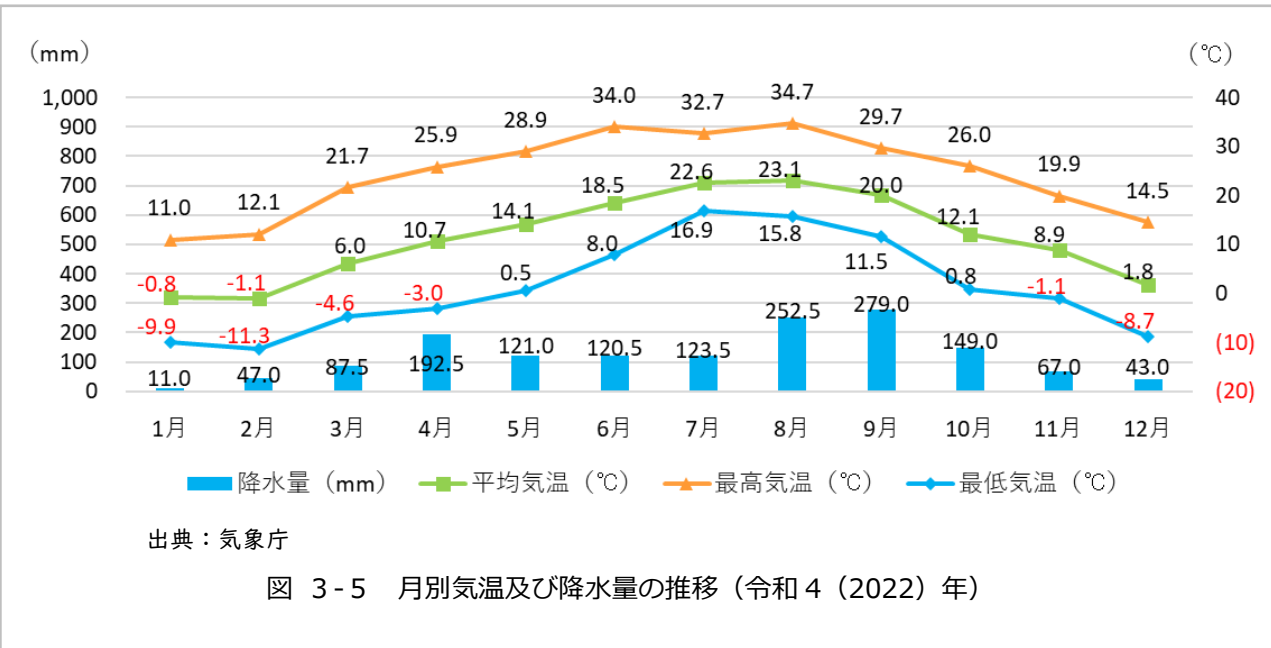


表 3-1 月別気温及び降水量の推移（令和 4（2022）年）

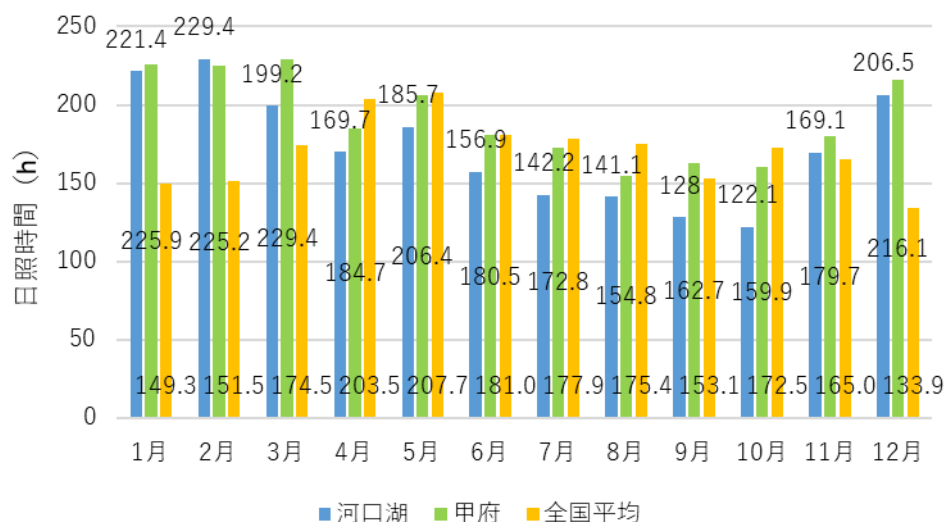
月		1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
降水量 (mm)		11	47	87.5	192.5	121	120.5	123.5	252.5	279	149	67	43
気温 (°C)	平均	-0.8	-1.1	6	10.7	14.1	18.5	22.6	23.1	20	12.1	8.9	1.8
	最高	11.0	12.1	21.7	25.9	28.9	34.0	32.7	34.7	29.7	26.0	19.9	14.5
	最低	-9.9	-11.3	-4.6	-3.0	0.5	8.0	16.9	15.8	11.5	0.8	-1.1	-8.7

出典：気象庁

第2項 日照時間

図 3-6、表 3-2 にアメダス河口湖観測所、甲府地方气象台における令和 4（2022）年の月別日照時間と全国都道府県庁所在地の气象台における令和 4（2022）年の月別平均日照時間の推移を示します。

アメダス河口湖観測所における月別の日照時間では 2 月が最も長く 229.4 時間、10 月が最も短く 122.1 時間、年間の合計日照時間は 2,071.3 時間となっており、都道府県庁所在地の平均値 2,045.2 時間よりも長くなっています。



出典：気象庁

図 3-6 月別日照時間の推移 (令和4 (2022) 年)

表 3-2 全国都道府県庁所在地月別日照時間上位5地点(令和4 (2022) 年)

令和4年	年間合計	1月	2月	3月	4月	5月	6月	7月	8月	9月	10月	11月	12月
平均値	2045.2	149.3	151.5	174.5	203.5	207.7	181.0	177.9	175.4	153.1	172.5	165.0	133.9
河口湖	2071.3	221.4	229.4	199.2	169.7	185.7	156.9	142.2	141.1	128	122.1	169.1	206.5
1 大阪	2319.6	162.2	171.3	192.1	217.4	214.6	213.4	188.8	215.4	178.2	201.6	184.9	179.7
2 神戸	2310	160.2	177.6	187.1	214.9	219.8	200.9	206.3	209.1	178.8	189.1	187.9	178.3
3 甲府	2298.1	225.9	225.2	229.4	184.7	206.4	180.5	172.8	154.8	162.7	159.9	179.7	216.1
4 徳島	2278	165.2	190.2	193.8	210.3	208.4	204.1	216.6	210.2	149.3	183.2	175.8	170.9
5 高知	2270.8	200.7	197.9	198.4	202.2	194	148.2	162.7	212.4	162	210.3	192.8	189.2

出典：気象庁

第6節 人口

図 3-7に本市人口及び世帯数の推移を示します。本市人口は昭和 60 (1985) 年以降、緩やかな減少傾向にあり令和 2 (2020) 年には 46,530 人となっています。一方、世帯数は増加傾向にあり、令和 2 (2020) 年には 18,337 世帯となっています。世帯数の増加に伴い、1 世帯当たりの人員は減少し、令和 2 (2020) 年には 2.54 人となっています。

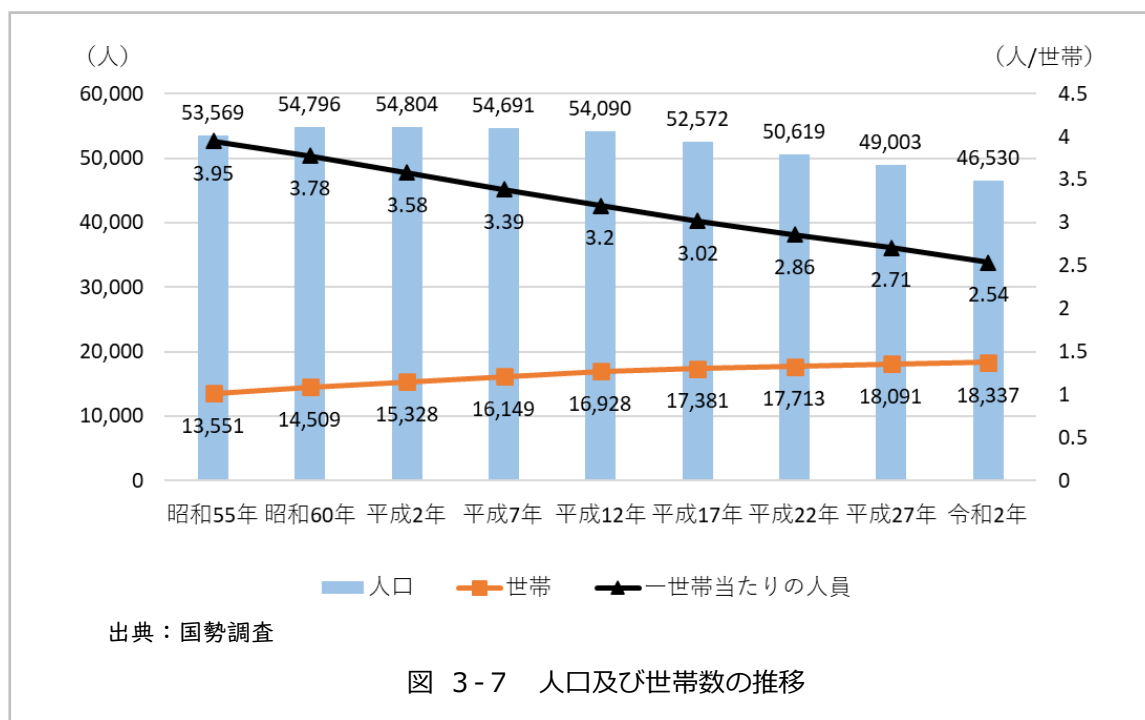


図 3-8、表 3-3 に本市年齢別人口の推移を示します。昭和 55 (1980) 年以降の推移では、65 歳以上の人口割合は増加傾向にあり、令和 2 (2020) 年には 30.1% となっています。一方、0 ～14 歳の人口割合は減少傾向にあり、令和 2 (2020) 年には 10.9% となり、少子高齢化の傾向がうかがえます。

また、本市の年齢別人口は山梨県全体と同様の構成割合となっています。

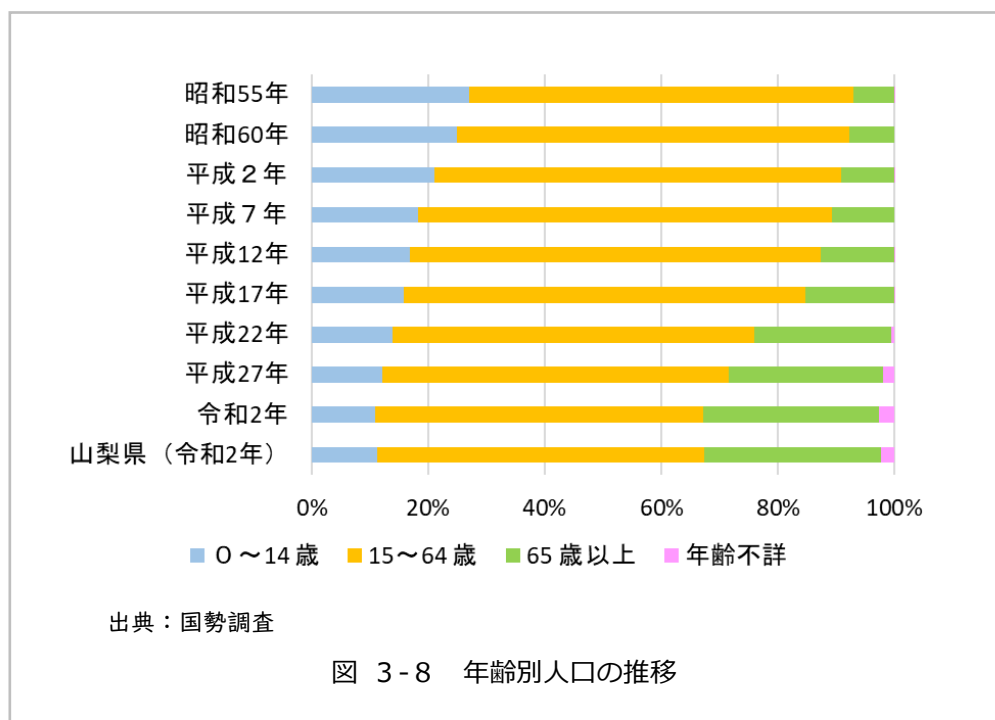


表 3-3 年齢別人口の推移

	0～14 歳		15～64 歳		65 歳以上		年齢不詳		総数
	人口	(%)	人口	(%)	人口	(%)	人口	(%)	人口
昭和55年	14,211	27.0	35,366	65.8	3,986	7.1	6	0.01	53,596
昭和60年	12,904	25.0	37,170	67.2	4,722	7.8	0	0.00	54,796
平成2年	11,199	21.1	37,659	69.8	5,887	9.0	59	0.11	54,804
平成7年	10,170	18.3	37,078	71.0	7,443	10.7	0	0.00	54,691
平成12年	9,310	16.9	35,635	70.4	9,122	12.7	23	0.04	54,090
平成17年	8,250	15.9	33,783	68.8	10,529	15.3	10	0.02	52,572
平成22年	7,052	13.9	31,397	62.0	11,884	23.5	286	0.57	50,619
平成27年	5,973	12.2	29,054	59.3	12,995	26.5	981	2.00	49,003
令和2年	5,088	10.9	26,184	56.3	14,006	30.1	1,252	2.69	46,530
山梨県 (令和2年)	91,629	11.3	453,633	56.0	245,884	30.4	18,828	2.32	809,974

出典：国勢調査

第7節 産業

第1項 就業構造

図 3-9、表 3-4 に産業別就業人口割合の推移を示します。昭和 55（1980）年以降、第 1 次産業及び第 2 次産業割合は減少傾向、第 3 次産業割合は増加傾向にあります。第 3 次産業の中では卸業・小売業が最も多く 3,244 人、次いで医療・福祉業の 2,408 人、宿泊業・飲食サービス業の 2,249 人となっています。

一方、就業人口は平成 7（1995）年を境に減少し、令和 2（2020）年の就業人口は 23,068 人となっています。

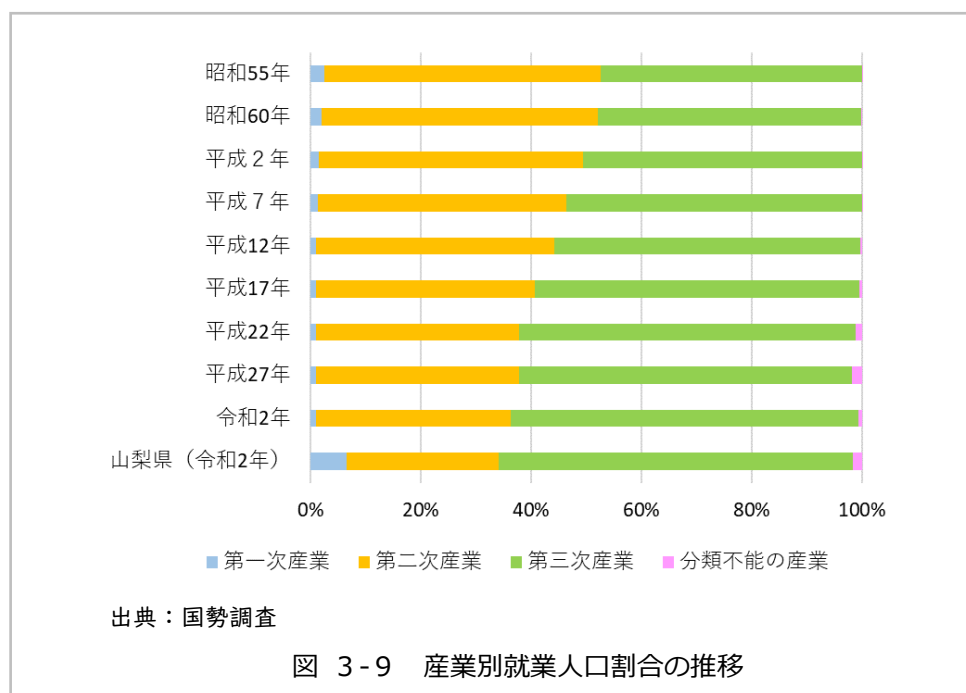


図 3-9 産業別就業人口割合の推移

表 3-4 産業別就業人口割合の推移

	第一次産業		第二次産業		第三次産業		分類不能の産業		総数 (人)
	就業人口	(%)	人口	(%)	人口	(%)	人口	(%)	
昭和55年	613	2.5	12,477	50.2	11,772	47.3	3	0.01	24,865
昭和60年	543	2.0	13,226	49.8	12,747	47.3	36	0.14	26,552
平成2年	412	1.5	13,401	47.9	14,161	50.6	10	0.04	27,984
平成7年	389	1.4	12,849	45.1	15,262	53.5	8	0.03	28,508
平成12年	314	1.1	12,251	43.2	15,737	55.5	67	0.23	28,369
平成17年	279	1.0	10,734	39.6	15,984	58.9	121	0.45	27,118
平成22年	266	1.1	9,167	36.7	15,273	61.1	291	1.16	24,997
平成27年	268	1.1	9,145	36.7	15,047	60.4	439	1.80	24,899
令和2年	252	1.1	8,116	35.2	14,554	63.1	146	0.63	23,068
山梨県 (令和2年)	26,392	6.6	109,721	27.5	255,564	64.1	6,901	1.73	398,578

出典：国勢調査

第2項 農業

図 3-10、表 3-5 に主業及び副業的農家数の推移、図 3-11 に農業産出額の推移、図 3-12 に農業産出額の内訳を示します。平成 12（2000）年以降も、農家数は減少傾向が続いており、令和 2（2020）年には 94 戸となっています。令和 2（2020）年の農業産出額は 3 億 1 千万円、その内訳は米が 48.4%、野菜が 25.8%となっています（農林業センサス結果等を活用した市町村別農業産出額の推計値）。

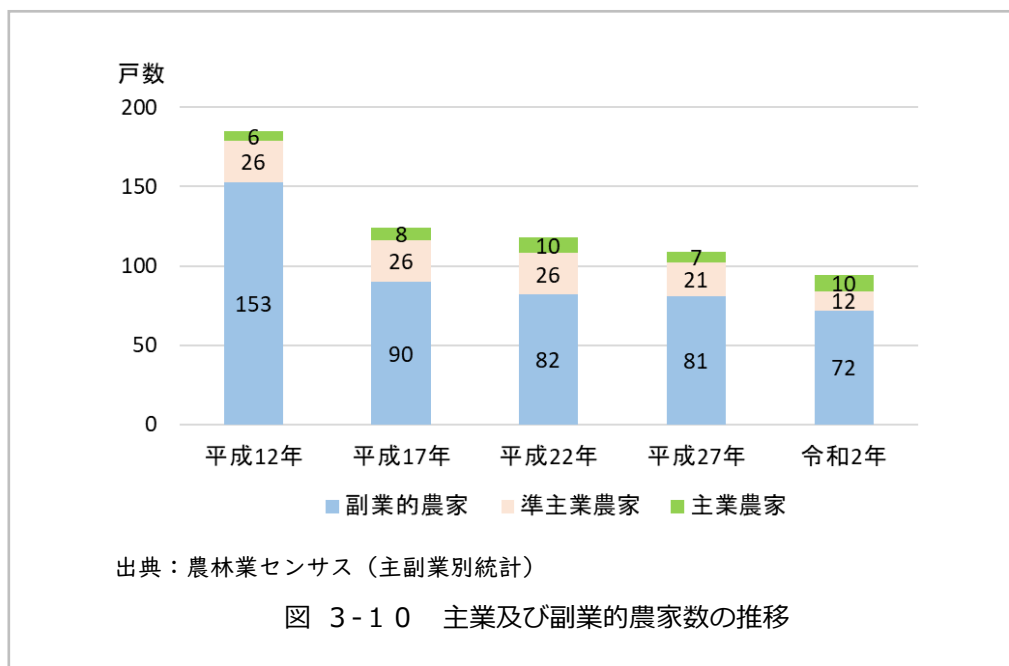
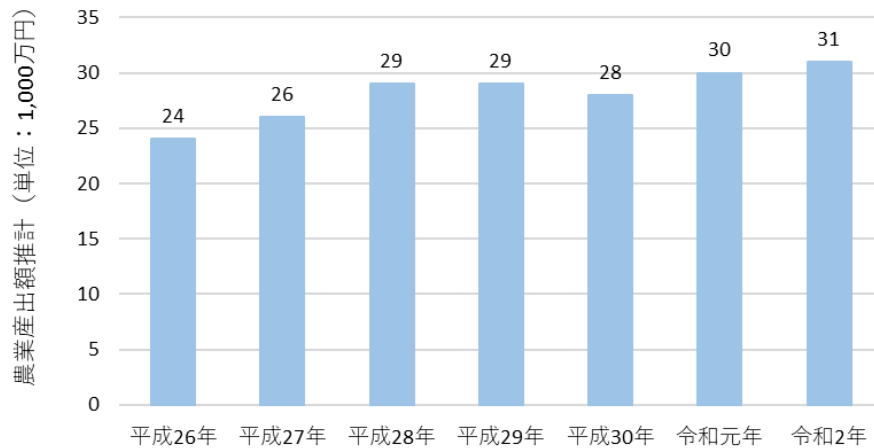


図 3-10 主業及び副業的農家数の推移

表 3-5 主業及び副業的農家数の推移

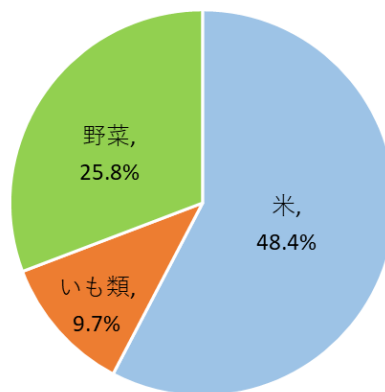
	平成12年	平成17年	平成22年	平成27年	令和2年
主業農家	6	8	10	7	10
準主業農家	26	26	26	21	12
副業的農家	153	90	82	81	72

出典：農林業センサス（主副業別統計）



出典：市町村別農業産出額（推計）

図 3-1 1 農業産出額の推移

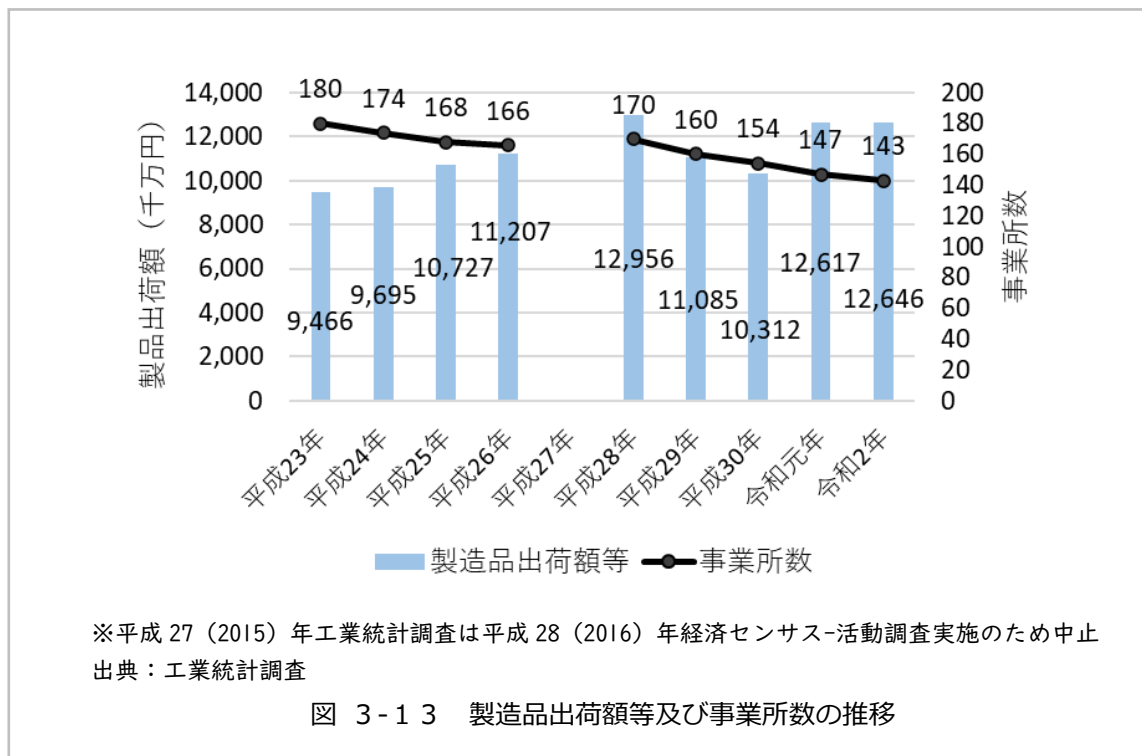


出典：市町村別農業産出額（推計）

図 3-1 2 農業産出額の内訳（令和2（2020）年）

第3項 工業

図 3-1 3 に製造品出荷額等と事業所数の推移を示します。製造品出荷額等は平成 30（2018）年の約 1,031 億円を境に増加傾向に転じ、令和 2（2020）年は約 1,265 億円となっています。事業所数は平成 28（2016）年以降、減少傾向にあり、143 事業所となっています。



第8節 動植物

第1項 植物

本市は上暮地の標高約 650m から富士山白山岳 3,756.4m までの温帯から寒帯まで大きな標高差がある地域のため、変化に富んだ植物分布を持ち、非常に多くの種類の植物を有しています。また富士火山の影響を受けて変異したフジハタザオなど富士山特有の植物とアカマツ林など火山高原に特有な森林を見ることができます。

まず、上暮地にはコナラ、ケヤキ、ミズキ、シデ類、カエデ類、アカマツ等が主に生息しています。下吉田、明見、上吉田にはケヤキ、エゾエノキ、イヌシデ、コブシ、コナラ、ハルニレ、キハダ、ミズキ、オニグルミ、イタヤカエデ、ウワミズザクラ等が生育しています。山林は、上暮地や明見、下吉田の市北部にはアカマツやスギの植林が多く、コナラ、アカマツを主体にした二次林を除くと、山林のほとんどは植林地となっています。国道 138 号を境に南部のほとんどは県有地で、アカマツ、カラマツ、シラビソなどの植林が行われています。また北富士演習場内は、ススキの草原となっています。この中でも剣丸尾のスバルライン沿道の原生林に近いアカマツ林や約 400 年前に植えられた諏訪の森のアカマツ林など全国他に例を見ない立派な森林が残されています。

吉田口登山道の標高約 1,500m 付近にはウラジロモミの天然林が、標高約 1,600m 付近からは亜高山性のコメツガの天然林、三合目近くの標高約 1,800m からはシラビソ、オオシラビソが混交し、五合目ではシラビソが優先しカラマツが多くなる天然林が続きます。そして、五合目上のダケカンバ林と垂直分布が見事に移り変わり、天然林として貴重な林が残されています。

また、つつじヶ原レンゲツツジ及びフジザクラ群落は往年の豪華さを取り戻すよう市、県、市民団体等によって長期にわたり復元が進められており、現在では保全と活用の取り組みが図られています。5 月下旬から 6 月上旬にはかなりのフジザクラ、レンゲツツジの花を楽しむことができます。

出典：富士吉田景観野外博物ランド 一部加筆修正

第2項 動物

本市には森林が多く残されており、イタチやテン、リス、キツネ、タヌキ、ニホンザル、ツキノワグマなどの大型哺乳類をはじめ、アカゲラやシジュウカラ、オオマシコ、カワセミといった野鳥、オオタカやハチクマ、ハイタカといった猛禽類が生息しています。

桂川や宮川では、ヤマメやニジマス、ウグイなどが見られます。また、明見湖ではメダカやフナ、コイなどの魚や、ヘイケボタルやミズカマキリ、ドジョウなどの昆虫や水生生物を見ることができます。

出典：富士吉田景観野外博物ランド

第3項 希少動植物

現在、多くの野生生物の絶滅が危惧されています。中でも身近な野生生物がいつの間にか姿を消しているのが現状であります。このような現象は日本特有のものではなく世界的な傾向でありますが、その主な原因は野生生物の生育・生息環境の悪化によるものとされています。

本県も、県内における絶滅の恐れのある野生生物の現状を把握し、その保護策の基礎となるべき資料を提供すること、その現状を広く周知することを目的とし、平成30（2018）年に山梨県レッドデータブックを改訂しています。

2018 山梨県レッドデータブックによると、本県全体の絶滅危惧種は植物 427 種、動物 179 種、本市に生育する絶滅危惧種(推定)は植物 99 種となっています。

表 3-6 山梨県レッドデータブックのカテゴリーと定義

カテゴリー		定義
絶滅		県内ではすでに絶滅したと考えられる種
野生絶滅		飼育・栽培下でのみ存続している種
絶滅危惧Ⅰ類		県内において絶滅の危機に瀕している種
	絶滅危惧ⅠA類	ごく近い将来における野生での絶滅の危険性が極めて高い種
	絶滅危惧ⅠB類	ⅠA類ほどではないが、近い将来における野生での絶滅の危険性が高い種
絶滅危惧Ⅱ類		県内において絶滅の危険性が増大している種
準絶滅危惧		現時点での絶滅危険度は小さいが、生息・生育条件の変化によっては「絶滅危惧」として上位ランクに移行する要素を有するもの

出典：2018 山梨県レッドデータブック

表 3-7 富士吉田市に生育・生息する絶滅危惧種の名称（推定）

カテゴリー	絶滅危惧種名称(推定)
絶滅	—
野生絶滅	—
絶滅危惧ⅠA類	オオアカウキクサ、ホザキヤドリギ、ハナハタザオ、イワシメツケ、キヌミレ、ムラサキツリガネツジ、タカサゴソウ、ヒメアマナ、ミクリ、ジョウロウスゲ、ヒメマツカサスキ、オノエラン、ウチヨウラン、ベニバナハナジャクヤク、オナシバンギセル、オニク、ハマウツボ、ナガエミクリ、アツモリソウ、キバナアツモリソウ(20種)
絶滅危惧ⅠB類	タチヒメワラビ、コキツネノボたん、グンナイイソバウゲ、ムラサキモネツル、ミソハギ、ムラサキセンブリ、フナバラソウ、マメダオンシ、ムラサキ、キセウタ、ニッコウヒヨウタンボク、ハヤサキヒヨウタンボク、コウグイスカグラ、キクアザミ、スジヌマハライ、コアツモリソウ、クマガイソウ、イチヨウラン、ヒロハハナヤスリ、コスギラン、オキナグサ、ヤマナシウマノミツバ、キヨスミウツボ、ヒメヒゴタイ、ホソバノアマナ、カヤツリスゲ、フトイ、ツチアケビ、スズムシソウ、サカネラン(30種)
絶滅危惧Ⅱ類	ハシバミ、ヤマブキソウ、サンショウバラ、ヒトツバハギ、ハコネコメツツジ、クリンソウ、サクラソウ、スズサイコ、カイジンドウ、ハンカイソウガマ、キバナウツギ、ツルカノソウ、イワシメツジ、オカオグルマ、アギナシ、マツカサスキ、カンガレイ、エビネ、ギンラン、テガタチドリ、ジガバチソウ、ヒメムヨウラン、カモメラン、ミズチドリ、バクイモ、エゾミソハギ、ゴマギ、ヒトツボクロ、イヌハギ、アオチドリ(30種)
準絶滅危惧	サンショウモ、ハンノキ、ツルシロカネソウ、フジハタザオ、アオナシ、カイワウロ、オバボダイジュ、ヒメスミレサイシン、クモイコザクラ、カワチシャ、キキョウ、コウリンカ、ヘラオモダカ、アマナ、ミヤマモジズリ、ヤマシヤクヤク、フッキソウ、クサタチバナ、ヒメイズイ(19種)

出典：2018 山梨県レッドデータブック

表 3-8 山梨県及び富士吉田市に生育・生息する絶滅危惧種の数

カテゴリー	植物種数		動物種数※
	山梨県	富士吉田市(推定)	山梨県
絶滅	0	0	7
野生絶滅	4	0	0
絶滅危惧ⅠA類	135	20	21
絶滅危惧ⅠB類	166	30	32
絶滅危惧Ⅰ類	0	0	2
絶滅危惧Ⅱ類	88	30	56
準絶滅危惧	34	19	61
合計	427	99	179

出典：2018 山梨県レッドデータブック

※動物種数は県下全域を対象とした公表値であるため、本市に生息するかは不明である。

なお、名称に関しては 2018 山梨県レッドデータブックを参照。

第9節 自動車登録台数

図 3-14、表 3-9に本市の自動車登録台数の推移を示します。平成 30（2018）年以降、合計登録台数は微減となっており、令和 3（2021）年の登録台数は 41,448 台となっています。乗用車及び軽自動車は、それぞれ 23,404 台、18,044 台となっています。

また、1世帯当たりの台数は、令和 3（2021）年には 2.26 台となっています。

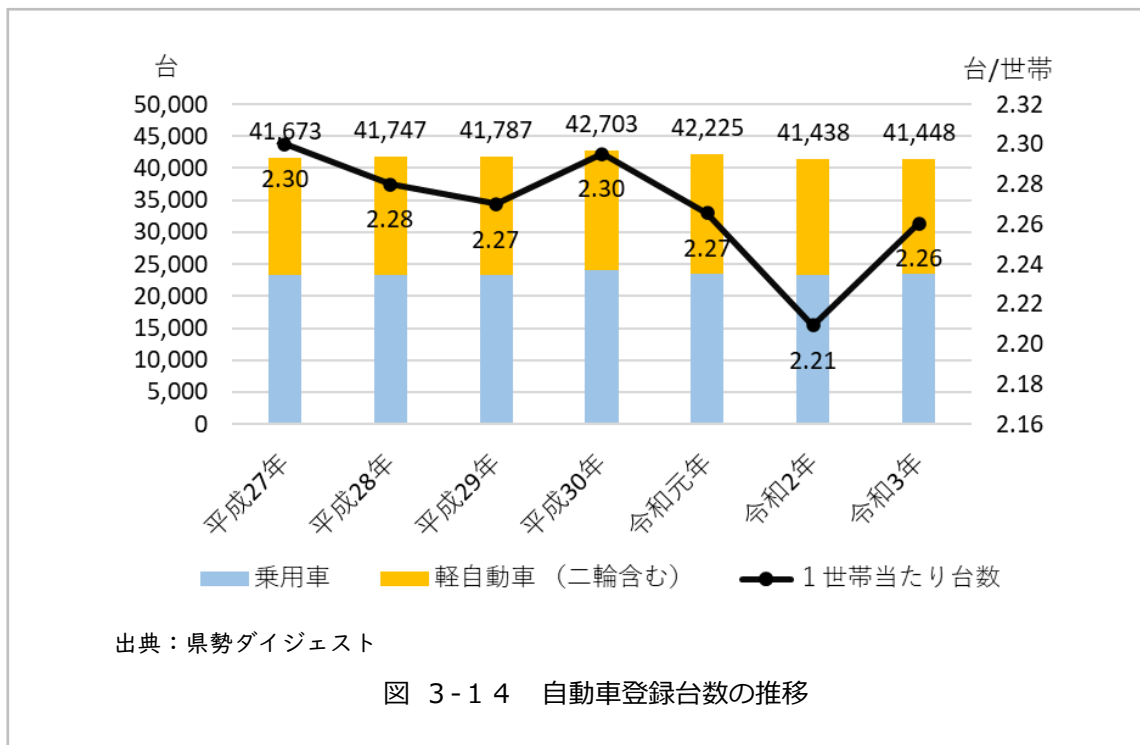


図 3-14 自動車登録台数の推移

表 3-9 自動車登録台数の推移

	乗用車（台）	軽自動車 （二輪含む）（台）	合計登録台数	世帯数	1世帯当たり 台数
平成27年	23,360	18,313	41,673	18,082	2.30
平成28年	23,245	18,502	41,747	18,273	2.28
平成29年	23,264	18,523	41,787	18,407	2.27
平成30年	24,068	18,635	42,703	18,606	2.30
令和元年	23,450	18,775	42,225	18,638	2.27
令和2年	23,394	18,044	41,438	18,755	2.21
令和3年	23,404	18,044	41,448	18,337	2.26

出典：県勢ダイジェスト